

論文

小学校における「総合的な学習の時間」の授業分析からみた実践課題

Practice problems from “Sogoteki-na-Gakushu-no-jikan” in an elementary school class analysis

小野間正巳*¹

要約：現代社会は、高齢化、グローバル化、情報の氾濫と情報過多などの現代的な課題が増えている。このことは、「知識基盤社会」へのパラダイムシフトがなされ、情報創造力、批判的思考力、問題解決力、意思決定力、コミュニケーション力、プロジェクト力、コラボレーション、ICT 活用力等の 21 世紀型スキルが求められることを示唆している。

このような現代的教育課題を考えたときに、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとする「総合的な学習の時間」の見直しと活動の充実が求められると考える。

この「総合的な学習の時間」の実態は、従来の日本型の授業スタイルの基本構造を変えないかたちで授業を行うようになってきているという実態が報告されている。このことは、果たして 21 世紀型スキル等で求めている力を養うこととどのように関係するのであろうか。活動だけがなされ、現代社会の課題や自らが設定した課題についての探求や課題解決への取り組みなど、本来求めた学びが十分になされないということが懸念される。そこで、「総合的な学習の時間」について、公立小学校における実践事例を検討し、子どもの学びの実態から見えてきたことを分析し、21 世紀型スキルに関する資質・能力を育てる「総合的な学習の時間」の実践上の課題を明らかにした。その課題の解決方略として「総合的な学習の時間と他教科・領域と連携を図る」「目標や実態などから多面的に検討し、状況に対応して修正し子どもの学びに即した展開できる単元計画の作る」「自らの学びを表現することにより、協働して取り組むこと、新たな学びの創出を経験させる」を提案した。

Key Words：総合的な学習の時間、21 世紀型スキル、授業分析、単元構想、協働性

1 問題の所在と研究目的

現代社会は、高齢化、グローバル化、情報の氾濫と情報過多などの現代的な課題が増えている。とりわけ、21 世紀は、情報社会であるといわれ、知識の創出が求められる時代でもある。このことは、工業社会で重視されてきた「ものづくり」をより良い「ものづくり」を創出する基盤であるとの考えから「知識基盤社会」と押さえ、情報創造力、批判的思考力、問題解決力、意思決定力、コミュニケーション力、プロジェクト力、コラボレーション、ICT 活用力等が求められることを示唆⁽¹⁾している。これらのいわゆる 21 世紀型スキルは、これまでの「ものづくり」対応型の教育ではなく新しく知識を創出し続けることが可能となる教育への転換、すなわち、工業社会型教育から知識創出型教育へとパラダイムシフトすることであるといえる。このような現代的教育課題を考

たときに、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとする「総合的な学習の時間」の見直しと活動の充実が求められると考える。

この「総合的な学習の時間」は、平成 20 年 3 月の学習指導要領の改訂⁽²⁾においては、総合的な学習の時間の特質や目指すところを目標として示し、この時間において育成する児童の資質や能力及び態度を明確にしてきた。しかし、「総合的な学習の時間」の実施状況について 2005 年と 2009 年に小・中学校教師を対象に調査した川村・紅林・越智⁽³⁾の調査によれば、「教師は学習指導要領改訂との関連で『総合的な学習の時間』を合理的に実践し、しかも限られた学習活動を効率的に行うことによって受け入れ可能なものにし、その学習の目標を着実に達成しつつあること」を明らかにし、報告をしている。しかし、同時に「その実践は、教師が事前に設定した環境のもとで子どもを指導するものに変化しつつあり、教

2016 年 1 月 6 日受付 / 2016 年 2 月 17 日受理

*1 Masami ONOMA

関西福祉大学 発達教育学部

師は従来の日本型の授業スタイルの基本構造を変えないかたちで授業を行うようになってきている。」という実態も報告している。このことは、果たして21世紀型スキル等で求めている力を養うこととどのように関係するのであろうか。活動だけがなされ、現代社会の課題や自らが設定した課題についての探求や課題解決への取り組みなど、本来求めた学びが十分になされないということが懸念される。そこで、本稿では、「総合的な学習の時間」について、公立小学校における実践事例を検討し、子どもの学びの実態から見えてきたことを分析する。その結果から、21世紀型スキルに関する資質・能力を育てる「総合的な学習の時間」の実践課題を明らかにし、その授業方略を提案する。本稿では、実践課題を明らかにするために、実践記録から子どもの学びの実態を分析し、その成果と課題及び活動における有効な手立てを明らかにし、それをういた今後の「総合的な学習の時間」の授業方略について提案する。

2 21世紀型スキルと「総合的な学習の時間」

21世紀型スキルとは、益川⁽⁴⁾によれば、『知識基盤社会ではすべての人が「新たな知識を生み出していく」ことが重視される。ATC21S（21世紀型スキルの評価と教育プロジェクト）が提出した白書（Griffin et al., 2012）は、各国の教育政策やカリキュラムを検討して、4領域からなる10個のスキルを21世紀型スキルとして示している。それは「思考の方法（創造性とイノベーション、批判的思考ほか、学び方の学習）」「働く方法（コミュニケーション、コラボレーション）」「働くためのツール（情報リテラシー、ICTリテラシー）」「世界の中で生きる（シチズンシップ、人生とキャリア発達、個人の責任と社会的責任）」である。総体として整理すると、「ある目標を解決するために、他者と共に様々なテクノロジーも活用しながら知識を生み出し、またそのプロセスを通じて新たな目標を発見するような知識を生み出し続けるスキル」といえる。授業を通して21世紀型スキルを引き出し高めていくには、問いに対する解を他者との対話を通じて生み出すと同時に、そこでさらなる問いが生まれ、学習を深め続ける知識構築活動の実現が欠かせない。』である。

このスキルは、文部科学省が提示する「生きる力」とどのような違いがあるであろうか。「生きる力」は、中央教育審議会⁽⁵⁾（1996年）で、次のように定義している。「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しよ

うと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」「自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力」である。さらに、現行学習指導要領では、「知識基盤社会の到来を念頭に、変化の激しい社会を担う子どもたちには、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた「生きる力」の育成が必要であり、基本的な知識・技能の習得、これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力、そして主体的に学習に取り組む態度などを育むことが重要である」とされている。「生きる力」との関係から白水⁽⁶⁾は、21世紀型スキルを『他者との対話の中で、テクノロジーも駆使して、問題に対する解や新しい物事のやり方、考え方、まとめ方、さらに深い問いなど、私たち人類にとっての「知識を生み出すスキル」と定義した。つまり、現行学習指導要領の「生きる力」に「テクノロジー（ICTリテラシー）」を加えたものが「21世紀型スキル」であるといえる。

そこで、21世紀型スキルを育てるための「総合的な学習の時間」目的を、指導要領で示す目的である思考力・判断力・表現力、そして主体的に学習に取り組む態度などを21世紀型スキルでいう「知識を創り出す（知識創出）」「協調して取り組む（協働性）」「テクノロジー（ICTリテラシー）の駆使した表現」のカテゴリー化を次のように行った。

- ①知識を創り出す（知識創出）；子どもの「興味・関心」「自らの視点で課題や問題をもつ」「課題追求の意欲をもつ」など自律性をもとに思考力・判断力を育てる。
- ②協調して取り組む（協働性）；自分の追究結果や方法を友達との情報交換や相互交流によって、自分なりの学びを創り出す。
- ③表現；テクノロジー（ICTリテラシー）を利用し、学びを振り返る活動（作品をつくる、発表会をする、本にまとめるなど）や自己評価カード、作品、写真、スケッチ、収集した資料などをまとめること（ポートフォリオ）活動による達成感・成就感。

3 対象と方法

(1) 調査対象事例

本稿に使用する実践資料は、筆者が直接関わり⁽⁷⁾⁽⁸⁾、学校の経営方針や教育課程のもと、取り組みの意図が明

確に示され、地域の実態に応じているだけでなく、地域の人々との協力・連携や他地域との交流がはかられ、子どもたちの自主的で主体的な取り組みが顕著な実践である。実践が行われたのは、平成11年から平成20年である。

選定した小学校は、S県I市立T小学校及びS県F市立A小学校である。T小学校は、S県I市の東部に位置し、台地及びO川の作った沖積平野が学区を占める。台地上は工場地帯、平野部は日本で最初に耕地整理がされた稲作中心の水田が広がっている。北側には、日本有数のトンボの生息地があり、台地斜面の里山と合わせて自然環境に恵まれている。また、東海道が通過して古代より様々な遺跡・遺構が数多くあり、文化財にも恵まれている。

A小学校は、S県F市の南部に位置し、E灘に面して砂丘、その北端に水田地帯が広がる。また、畑地も多く、メロン温室、小麦畑などに利用されている。水田が広がる一帯は、渡り鳥の生育地となっている。さらに、国道150号線沿いには工場が立地する。近年地震発生に備えて、避難地として「命山」が築造された。

(2) 分析の方法

「総合的な学習の時間」において育てる資質・能力と21世紀型スキルとの関係からカテゴリー化した①知識を創り出す(知識創出)②協調して取り組む(協働性)③テクノロジーを駆使した表現の3つの分析の視点について実践記録から読み取り整理し、実践に生きる内容を記述する。分析にあたっては、木下⁽⁷⁾の開発した「M-GTA」を参考にし、実践事例ごとに実践者の記述した実践記録を分析した。

分析の方法は次に示す通りである。

- ①授業者の実践記録を筆者が読み込みおおよその意味をつかむ
- ②具体的な活動に着目し単文をコードとして抽出しコード化する
- ③コード化した意味を「概念」として創り出す
- ④いくつかの「概念」を統合して、その時間の学習の意味をカテゴリーとする
- ⑤この生成したカテゴリーと「生きる力」「21世紀型スキル」の資質・能力カテゴリーとの関係を表にし、解釈を加えた

4 T小学校における実践事例

本校学区を流れるO川及びトンボの宝庫「O沼」の自

然にふれあう体験及び人や地域や異文化とかかわる体験を重視した活動を取り入れる。このような自然や地域などの環境を生かした単元を設定して、教師と子どもと一緒に活動している。

学年ごとに地域に素材を求めて、子どもの課題意識の連続を図りながら、子どもの課題に結び付く『出会い』の場を工夫したり、子どもたちが課題を解決するために経験したりすることを考えた支援に留意している。そして、学校を取り巻く自然や社会等の環境にかかわり、国際化に対応できることが本校の子供にとって大切であると考え、次の学習テーマを設定している。

環境；子どもたちの身の回りにある自然や社会や生活などとかかわることによって環境について自分なりの考えを持つこと。

国際理解；身の回りの外国の人や文化などとかかわることにより、自分の地域や外国のよさに気付くこと。

単元の設定にあたっては、これらのテーマを受け、学習可能な内容を年間指導計画をもとに、各教科・領域との関連を考えて設定している。

「出会いの場」では、子どもたちの願いや興味・関心をもとにして工夫すること、「追求の場」では課題解決にあたっての子ども一人一人の思いを大切にしたい支援を工夫すること、「交流の場」では、個々が相互交流を通して共に学ぶことを意識した設定をすることを大切にしている。

(1) 事例Ⅰ 3年単元「昔さがしの旅に出よう」

23時間扱い

①目標

T地区の自然・文化やならわしに関心を持ち、調べたり体験したりする事を通して、T地区により親しみを感じることができる。

②単元設定の理由

地域に住む人々から様々な文化・伝統・風俗等について体験を通して学ぶことによって地域を理解し、そのよさに気付くことができると考えている。また、自分が住んでいる田原地区の人々の日常生活の営みや、人々が慣れ親しんだ遊びや古くから行われている「ならわし」について、様々な人とのコミュニケーションやふれ合いを通して、そのよさを感じ取ることによって親しみをもつことができると考えている。

そこで、昔の子どもの生活を体験したり、家族や地域の方々とふれ合ったりして、自分の住むT地区に親しみ

を持ち、今とは違う暮らしぶりを知ることで、多くのことを感じるだけでなく、昔の遊びをこれからの生活にも取り入れたり、他の学習でも地域の人との関わりを持つようとしたりすることを願って本単元を設定した。

③学習計画 () は時数

1. 昔のくらしをしてみよう (4)
2. 昔さがしの旅の計画を立てよう (1)
3. 昔さがしの旅に出よう (15)
 - 昔のお菓子を作って食べよう
 - 昔の遊びをしよう
 - 昔の学校を訪ねよう
 - 学校の回りの昔を探そう
4. 家の中の昔を見つけよう自分の旅を伝えよう (3)

④学習展開

ア. 昔の遊びをしてみよう (8 / 23時)

「輪まわし」「竹馬」「おはじき」「石けり」「お手玉」「水雷ごっこ」の遊びができるように道具・材料・遊び方カードを用意し、自由に遊ばせた。中でも「輪まわし」「竹馬」「おはじき」「石けり」「お手玉」で遊ぶ子が多かった。今回は水雷に挑戦する子はいなかった。

M子は、ヨーヨーのような蹴鞠を持ってきていたにもかかわらず、始めは、おはじきに夢中になっていた。おはじきのやり方を知っているので、友達に教えてあげていた。

続いて、お手玉に挑戦し、私の技を見ては、同じようにやってみようと夢中で取り組んでいた。

どの子も自分のやりたいことを選んで挑戦をしていたが、中でも、K子は石けりを自分の知っている点数式の遊びにして遊び始めた。それを見ていた回りの子どもたちが、楽しそうだったのか集まってきて、K子に教わっては遊んでいた。

授業後、「もっと遊びたい」と言う声が多く、中でもY夫とM絵は「昔の人は輪ころがしみたいなのに、いらぬ物を使って遊んでいたんだね。」と話していた。M絵は、今の遊びと昔の遊びを比較して、昔の遊びのよさも感じ取れたようだ。

イ. 作って遊ぼう (12 / 23時)

R子のおばあさんが「じゅず玉」を持ってきてくれたので、R子とA子とM子は針と糸を使って、じゅず玉のネックレスやプレスレットを作った。できあがるとM子は、お手玉の新しい遊び方やおはじきのやり方について、R子のおばあさんから教わり、友

達と一緒に楽しんでいた。

A子のおじいさんは、「竹とんぼづくりの名人」として、男の子達にいろいろなコツや、刃物の使い方を教えてくれていた。特に、羽のそり具合や、印を付けて切り口を決めるなど、細かい作り方だったが、子どもたちもよく名人の技を見て真似して作っていた。

YT男・I子のおばあさんは、AY子やAK子の質問に答えて、昔の家の中の様子を教えていた。二人ともその話に真剣に耳を傾けていた。とても楽しそうだった。また、別の教室で竹とんぼ作りに、10時間連続して取り組んでいるR男は、めずらしく一つのこと集中して、今日は、名人の教えを守りながら、とてもよく飛ぶ竹とんぼを完成させることができた。ふんわりと上に浮かぶ竹とんぼをR男は誇らしげに友達に見せていた。

ウ. お菓子を作ろう (16 / 23時)

今日は、昔のお菓子を作るようになった。R男・Y子のおばあさんとR子のお母さん。そして、O先生が手伝ってくれて、「きなこあめ」「五平餅」「べっこう飴」を作った。どの子もわくわくして、楽しそうに作った。

M子は、きなこあめの作り方を面白そうにおばあさんたちやO先生から聞いていたが、やがて、自分でも作り始めた。作る手つきは、上手とは言えないが、とても楽しそうに作っていて、できあがるのが楽しみであると何度も友達に語りかけていた。

この時間、五平餅のみそにおいて、砂糖をとかず甘い匂い、家庭科室が駄菓子屋さんのようだった。途中で味見をするのも、楽しみの一つで、べっこう飴も、きなこ平餅もとてもおいしいと口々に話していた。

(2) 事例Ⅱ 4年単元「O川のなぞを探ろう」 23時間扱い

①目標

子どもたちが身の回りの生き物や植物などの自然とかわかり、自然のよさを味わい、人と自然とのかかわりに気づくこと

②単元設定の理由

学校のすぐ東側を流れるO川は、カヌー教室を行う場所であることから、子どもたちにとってはなじみ深い場所である。河原には、虫・草・石などの自然物があり、身近に観察ができる場所でもある。しかし、日常生活で

は、安全上の配慮もあることから、河原に出かけて触れ合うことはほとんどない。そこで、河原で観察したり、関わったりできる自然物と触れ合うことで感じたり、疑問に思ったりしたりしたことを解決する活動を通して、O川について子どもたちがより親しんでほしいと考え本単元を設定した。

③学習計画 () は時数

1. O川に行こう (5)
 - O川で遊ぼう
 - 活動計画を立てよう
2. O川を調べよう (12)
 - 生き物について調べよう
 - 水について調べよう
 - 石集めをしよう
 - 年度を調べよう
 - 川の汚れを調べよう
3. O川のことを表そう (6)
 - 水族館を作ろう
 - 図鑑を作ろう
 - 本を作ろう
 - 博物館を開こう

④学習展開 (5 / 23時)

今日は、この学習の活動計画をたてた。「これまでの遊びで自分がどうしてかな、不思議だなと思ったことをどんどん調べたり、実際に試したりしていこう」と投げかけた。

この前の学習でI・Mさん達が、「水の流れに興味を持ち、浅いところは、水によって小さな石や砂が運ばれ、大きな石だけが残っていること、それが水を遮って大きな波ができることを観察し発見したこと」を例に挙げ、話をすると意味が分かったようだった。

また、Y・Aさん、I・Mさんから「発表会もしたい」という声が挙がり、みんなに投げかけていくと、「やった方がいい。自分の知らないことを友達が発表して教えてくれるから」とY・YさんやS・Rさん、Y・Y Oさん達も賛成した。そこで全体にはかり、発表会をすることとなった。

それでも中にはこのようなことが苦手な子もいるので、「発表会といっても、必ず模造紙に書くことばかりが発表ではない。集めたものを見やすくまとめて見せたり、説明したりすることも発表だよ」と話した。

こうした話し合いを聞きながら、これからの学習計画について一人一人が立てた。S・Kさんの学習計画は3

つあった。始めはなかなか計画ができずに困っていた。私は、しばらくそれを見ていたけれど、どうもこのままでは進まないと思い「どうしたのかな」と声を掛けた。すると、S・Kさんは、「何となく考えているんだけど、本当にそれでいいか分からない。」と答えた。そこで、「まず不思議に思ったことを書いてみるといいよ。」と助言をした。しばらくすると次のような計画を見せに来た。

- ㊦石はどれくらいの種類があるかな?
- ㊧何種類くらいの生き物がいるか調べたい。
- ㊨何でO川という名前がついたのか調べてみたい

まずは、㊦の石の種類について調べ始めるようだ。河原の石を拾って集め、石を展示するらしい。これを見て、私は認め「これでいいんだよ。」と一言返事をすると、とても安心したようであった。

その他の子の計画の内容は、生き物の水族館、石の展覧会、水の温度の違いが一番多かった。または、O川の歴史、O川についての思いをインタビューしたい、水のきれいさを調べる、微生物を調べたいなどであった。

(3) 事例Ⅲ 自然とかかわる人と共に活動しよう 24時間扱い

①目標

自然とかかわる活動をする人に話を聞いたり、共に活動したりすることを通して、その人の考え方や生き方を感じとり、その人のよさに気付くとともに、自分らしい生き方につながる、自分なりの見方や考え方を育てる。

②単元設定の理由

本校区の北側には、全国で最もトンボの種類が多く生息する「O沼」がある。この池一帯は、トンボだけでなく、野草や小動物の生息地であり、自然観察に適した場所でもある。しかし、近年、台地上にできた工場・住宅から流れ出る生活排水などによって環境汚染が進み、動植物の生態に変化が生じてきた。これ以上の悪化を防ぐと、市民団体、続いて市が対策にのりだした。そのような人々との関わりを通して、自然を守ることの大切さ、その意義にふれ、身近な自然を守るために自分たちができることについて考えたり、実際に体験を通して学んだりしてほしいと考える。そこで、自然を守るために活動している人と深く関わることで、自然の大切さや守ることの意義を考え、自らできることに進んで取り組むことの意義を学んでほしいと考え本単元を設定した。

③学習計画

- ア. 自然と共に生きようとしている人の話を聞こう (5)
- ㊦ Iさんと共に桶ヶ谷沼で活動する

①親水公園計画に取り組む人と活動する

②Oさんと太田川の水質を調べる

イ. 取り組みたいことの学習計画を立てよう (2)

ウ. 身近な環境について調べよう (12)

⑦太田川の自然について調べる

①水質検査をする

②動植物に適した環境を調べる

③水生生物について調べる

④昔と今の環境を比べる

⑤F川公園計画を調べる

⑥生き物の体の仕組みを調べる

エ. 自分が調べたことを発表しよう (2)

オ. 自分ができることに取り組もう (3)

⑦空き缶拾い

①ポスター作り

②自然を守る活動へ参加する

③O沼を守る活動へ参加する

④F川公園計画への提案

④学習展開

ア. ヤゴを調べた (10 / 24)

Tは、学習ボランティアのIさんがくれた資料をもとにヤゴの特徴を調べた。調べ終わると、雨の中、ヤゴや水生生物を探しに行った。

Tは、まず理科実験槽に行くが、ヤゴが見つからず、とんぼ池へ行った。とんぼ池で、私(教師)が「雨でもトンボ結構いるねえ」との問いかけに「うん」とだけ答え、すぐに手を水の中に入れ、夢中でヤゴを探し続けた。しかし、見つからず残念そうである。友達が、ヤゴの抜け殻を実験槽で見つけたという言葉も聞かず、雨に濡れ、黙々と探し続けていた。やっと、ヤゴを見つけたTは、「やったあ」と本当にうれしそうにビンに入れ、「ヤゴかわいいー」「もう1匹欲しいなあ」などと言いながら観察をしていた。

教室に戻ったTは、水槽・エアポンプなどを用意し、どのような環境がいいのか調べるためにヤゴを飼い始めた。ヤゴを育てる環境について調べる活動の中で、また、IさんとかかわりたいとTが思えば、きっと学習に深まりが見られるかもしれないと考え、私は、本人の取り組みを見守ることとした。

イ. ザリガニの仕組みを調べる (12 / 24)

Tは、ザリガニの体の仕組みを図書室の図鑑で調べた。次に、実際に確かめるためザリガニを捕りに学校の北側の水田へ行き、側溝にいるザリガニを見つけ捕

まえた。

そして、ザリガニを観察し、記録をつけていた。はっきりとしないことがらがあるようなので、「Iさんに質問してみれば」と声を掛けたが夢中で取り組んでいた。

しばらくして、私に、先日飼い始めたヤゴが5日に1匹、6日にまた1匹死んだため「ヤゴを調べたら逃がしてあげなきゃ」と話しかけてきた。私は、「ヤゴが育つ環境は、どういう環境何だろうね」「なぜ、ヤゴは死んだのかね」と尋ねた。すると、「そのことはよく分からない。」と答えたので、「ヤゴが育つにはどのような環境が必要か、学習ボランティアのIさんに聞くといいよ。」と助言をした。Tは、迷っていて、すぐにIさんに聞こうとしなかった。Tが迷い始めたということは、今までとは違うと感じた私は、あまり、しつこく言わないようにして、本人の口から、Iさんに聞こうとするのを待つことにした。

5 A小学校における学習活動 39時間扱い

(1) 事例Ⅳ 4年単元「私たちの海、D海岸を守ろう」

①目標

身近なE灘に広がるD海岸について、ゴミ拾い活動、地引き網、塩を作り、アカウミガメの放流などの体験を通して感じたことや考えたことを手がかりとして、自分たちができる自然環境を守る活動に取り組むことができる。

②単元設定の理由

総合的な学習の時間において、3年生で小麦の栽培、自慢カルタ作り、4年生で地引き網や塩作り、5年生では米の栽培体験、山梨県明野小との交流、6年生で歴史体験や英語学習などに取り組んでいる。また、全校では「全校チャレンジ」とし、その主な活動を「サウスビーチタイム」と名付け、D海岸で縦割り活動による「砂の造形」や「海岸清掃」などに取り組んでいる。

こうした学習に取り組む中で、特に4年生の総合的な学習では、「海岸での体験学習をし、その体験で感じたことを表す子を育てること。」「子供たちの願いや思いを大切にすることによって、子どもと共に学びを作ること。」を考えている。そこで、D海岸を身近に感じるだけでなく、自らの生活と関わらせながら、そのよさを理解し大切に守っていくための活動に取り組ませたいと考え本単元を設定した。

③学習計画 () は時数

ア. 地域発見遠足にD海岸に行こう。(4)

⑦グループで散歩しよう。

⑧みんなでドッジボールをしよう。

イ. D海岸で調べてみたい、やってみてみたいことを話し合おう。(1)

ウ. ゴミ拾いをしよう。(3)

エ. 地引き網をしよう。(4)

オ. アカウミガメのひみつを探ろう(3)

カ. 塩づくりにチャレンジしよう(8)

キ. 豆腐づくりにチャレンジしよう(6)

ク. D海岸の素晴らしさを伝えよう。(6)

ケ. 海を守ろう大作戦(4)

④学習活動

ア. 地引き網をしよう

事前に、どんな方法で地引き網をするか、E灘ではどのような魚がとれるか等を調べた。調べたことを話し合う中で、とれた魚をどうするかという問題が出てきた。そこで、魚の命を大切にすることについて話し合い、結果「食べることが海の命を大切にすることにつながる。」という考えにまとまった。そして、とれた魚を「海で塩焼きにして食べてみたい。」という希望が多く、七輪で焼いて食べる活動を取り入れることにした。

地引き網当日は、漁師さんが揺れる船を沖へ出して網をかける様子を見て、「漁師さんは命がけで漁をしているんだね。」というつぶやきが聞こえ、重い網をみんなで協力して引いた。網が上がると網の中をのぞき込んで歓声を上げる子どもたちの姿が見られた。漁師さんには、とれた魚について説明を聞き、その後、そのまま海岸で、七輪を使って焼いて食べた。とれたての魚をみんなで焼くことはとても楽しい体験で、いつもは魚が苦手な子も食べる姿が見られ、記録には魚が本当においしかったという感想が数多く書かれていた。

イ. アカウミガメのひみつを探ろう

はじめに、保護活動をしているビデオを見てアカウミガメへの関心をもたせた。

砂浜についた車の轍をずっと歩き続ける子ガメの映像を見たり、「D海岸でも生まれているアカウミガメの命が簡単に奪われていること」、「ビニールをクラゲと間違えて食べ、死んでしまうカメの話」を聞いたりし、子どもたちはかわいそうだという気持ちをもつと共に、ウミガメについてもっと知りたいと思う気持ちを強くもった。

子どもたちは、ウミガメの種類や産卵の仕方、ウミガメの保護活動の様子などについて、図鑑やインターネットで進んで調べた。夏休みに、保護をしている団体サンクチュアリセンターに行き、調べ学習をしてきた子もいた。

その後、D海岸で子ガメの放流体験を行った。海岸でサンクチュアリジャパンの方から、「海岸では卵が守れない理由と子ガメが海に帰れない原因」「ウミガメがくるこの海岸をみんなで守ってほしいということ」などの話を聞いた後、子ガメの放流をした。自分のカメに名前をつけ、海岸を一生懸命歩く子ガメを見ながら、小さな命の大切さを実感することができたようである。学校に帰ってからも、「今頃どの辺を泳いでいるかな、ほくのカメ」とカメのことを考えていた。自分たちの手から新しい命が送り出すことは、子どもたちの心に大きな感動を与えた。

ウ. 塩づくりにチャレンジしよう

D海岸でとれた塩と普通の塩を比べて、色の違いや形状の違いなどに気付かせて塩に関心を持たせた。塩と共ににがりごとれるということに気づいたことからにがりを使って豆腐作りの方法を調べていった。子どもたちから、実際に海岸で塩作り、にがりを使って豆腐作りをやってみたいという意見が出された。そこで地元の昔から塩作りに取り組んでいるOさんをお願いし、昔ながらの方法で取り組んだ。大きな熊手のようなもので塩田を作ったり、柄杓を使って塩田に海水をまいたりして、子どもたちは夢中になって活動をした。大きな樽から濃い海水があふれ出てきた瞬間は大きな感動があった。濃い海水を学校に持ち帰り、煮詰めて塩とにがりに分けた。

エ. 豆腐づくりにチャレンジしよう

A町産の大豆と塩作りでとれた「にがり」を使った豆腐作りでは、まず、大豆をミキサーですりつぶし、豆乳をしぼる。水が少なく、しぼるのが大変だったが、子どもたちは大変根気よく行った。豆乳を少し煮てから、にがりを入れると見る間に固まっていく様子を見て、「なんでにがりで固まるの。」と驚く様子が見られた。

できあがった豆腐は、海のにがりの味がする、味の濃い豆腐になった。子どもたちは大豆から豆乳をしぼる体験などに根気よく取り組み、にがりによって固まる様子に驚く姿が見られた。

オ. D海岸の素晴らしさを伝えよう

山間地のS町のS小学校で、学校近くを通る「潮の道」について調べていることを知った教師は、S小学校から手紙とレポートを送ってもらい、子どもたちに示した。手紙を読んで子どもたちは、塩作りのことを教えてあげたいと考えた。また「塩の道」に子どもたちは、大変興味をもち、S町の塩の道を歩いてみたいという意見が出された。そこで、本当に必要な学習か、子どもたちの考えを深める話し合いと交流の計画を話し合った。

S小学校との交流学習では、山の自然の中で発見したことが多くあった。実際に塩の道を歩き、昔の人は塩を運ぶために大変な苦勞をしていたことを体験することができた。

昔、何度も重い塩の荷を積んで運んだため、石がけずれているところや馬頭観音などのところでは、S小学校の子どもたちの説明を聞いた。塩が実際に運ばれた昔に思いをはせ、「こんな道を運んだの。」「塩って貴重だったね。」などのつぶやきが聞こえた。子どもたちは改めて塩の大切さを感じることができた。その後、S小学校では、海での体験をもとに、自分たちが感じたこと、分かったことなどをクイズや説明、劇などで伝え、ミニ本を配って説明したグループもあった。カ.海を守ろう、大作戦

これまでの活動で感じたこと、考えたことをもとに、自分たちにこれからできること、すべきこととは何だろうと話し合った。子どもたちからは「D海岸には、自分たちが放流したカメがもどってくるかもしれない。それまで海岸をきれいにしておきたい。」「海を守っていかねければ。」「自分たちだけできれいにしても、また海にごみを捨てる人がいるかもしれない。」「もっと多くの人に伝えよう。」などの意見が出され、話し合いが深まっていった。

また、子どもたちから出された考えをもとに、「カレンダー」「ビデオ」「歌」「看板」「ポスター」「下じき」「ホームページ」などを作って伝えることにし、計画を立てて制作活動を行った。また、キャラクターを作って、海の大切さを伝えたいという意見も出てきて、キャラクターを募集し、作品に掲載していくようになった。制作活動には大変時間がかかったが、子どもたちは一生懸命活動に取り組んだ。出来上がった看板は、海岸と学校前に設置した。また、ちらしやポスター、下じきなどを代表児童がもって、A町教育委員会を訪ね、教育長さんに学習の成果と海を守ってほしいというこ

とを知らせた。このほか、役場、町立図書館なども訪問し、作った物を多くの人に自由にもっていってもらえるようお願いし、置いていただいた。新聞社等にも知らせたところ、取り上げられ、多くの人に知らせるという子どもたちの願いが実現された。

6 考察

(1) 知識を創り出す(知識創出);子どもの「興味・関心」
「自らの視点で課題や問題をもつ」「課題追求の意欲をもつ」など自律性をもとに思考力・判断力を育てる

事例	コード	概念	カテゴリー
I	<ul style="list-style-type: none"> 自分のやりたいこと。 自分が知っている。 技を見て真似してみる。 昔の子どもになれたのではないかと感じた。 今の遊びにはない昔の遊びのよさを感じていたようだ。 	<ul style="list-style-type: none"> 追体験 昔と今の比較 	<ul style="list-style-type: none"> ○自律性 ○自己学習
II	<ul style="list-style-type: none"> 発表会もしたい やった方がよい 本当にそれでいいのか分からない。 活動したことで感じたり、思ったり、考えたりしたことを話し合うことで計画づくりが進む。 	<ul style="list-style-type: none"> 感動体験 意見交流 	○自主性
III	<ul style="list-style-type: none"> ヤゴを探し続けた。 ザリガニを実際に調べるために捕りに行った。 うれしそう。 雨に濡れ、黙々と探し続けた・自分で見つけた生物を続けて観察したいという思いが強い 実物で調べたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 直接的な関わり 	○自主性
IV	<ul style="list-style-type: none"> 調べたことを話し合う。 塩焼きにして食べてみたい。 命がけで漁をしている。 魚が本当においしい。 ウミガメがかわいそう。 小さな命大切さを実感した。 調べ学習をしてきた。 豆腐づくりをしてみたい。 昔ながらの方法で。 塩づくりを教えてあげたい。 計画を話し合った。・地引き網、ウミガメ、塩づくり、豆腐づくりといしきが連続した活動の展開。 調べて分かったことは、誰かに伝えたいという意識が誰にでもある。 なぜ、どうしてという疑問が学習活動をつなぎ、発展させている。 	<ul style="list-style-type: none"> 直接体験 直に触れる 経験の想起 制作活動 	<ul style="list-style-type: none"> ○思考力 ○判断力

計画を立てる段階では、まずこれまでの活動を振り返りながら、自分と学習対象とのかかわりの様子から、その時に感じたこと、考えたことなどを発表し合いながら、

どんなことを自分が最初疑問に思ったかを徐々にはっきりさせていくことが大切である。その際、子どもたちが書いた感想や自己評価カードなどをもう一度読み返すことを助言するとよい。

このような体験によって、子どもたちは、少しずつ自分の疑問をまとめて、グループに分け、これまでの経験ですぐに解決できないことがらを解決するための学習計画を作ることができるようになる。

(2) を友達との情報交換や相互交流によって、自分なりの学びを創り出す。

事例	コード	概念	カテゴリー
I	<ul style="list-style-type: none"> 友達に教える。 集まってきて、教わって遊んだ。 友達と一緒に楽しんだ。 名人の教えを守りながら。 何度も友達に語りかけていた。 同じ遊びに取り組むことで親近感がわく。 協力し合って遊ぶことで共通の話題となる 		<ul style="list-style-type: none"> 共同性 相互理解 扶助 ○協働性
II	<ul style="list-style-type: none"> 自分の知らないことを友達が教えてくれるから。 お互いが教え合うことが大切であることを意識している。 	<ul style="list-style-type: none"> 相互交流 伝え合い 	○共同学習
III	(対象なし)		
IV	<ul style="list-style-type: none"> 重い網をみんなで協力して引いた。 塩田に海水をまくなど夢中になって活動した。 海での体験を様々な方法で伝えた。 計画を立て制作活動を行った。 チラシやポスターを作成した 同じ体験に取り組むことで話題に共通性が生まれ、計画立案・共同作業等において共通理解がしやすい。 自分たちが伝えたいことがはっきりしていると、伝えるための制作活動に広がりや深まりができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 協調性 協力 交流 	○協働性

子どもが追究した結果は、それぞれ個性的で独創的なものが多い。しかし、それは、独り善がりになることもある。そこで、自分の追究結果や方法を友達との情報交換や相互交流によって確かめていくことが大切となってくる。この確かめが、自分の考えをより確かなものとしていくとともに、自分を確かに表現することになる。また、自分のよさに気づき、自分に自信をもって満足感を味わい、学ぶ楽しさを味わうことができることとなる。

(3) 表現；テクノロジー（ICTリテラシ）の利用し、学びを振り返る活動（作品をつくる、発表会をする、本にまとめるなど）や自己評価カード、作品、写真、

スケッチ、収集した資料などをまとめること（ポートフォリオ）活動による達成感・成就感、協働性；自分の追究結果や方法を友達との情報交換や相互交流によって確かめていくこと

事例	コード	概念	カテゴリー
I	<ul style="list-style-type: none"> レポート 自分の家の昔のことを調べ報告する。 	<ul style="list-style-type: none"> 異世代交流 	○協働性
II	<ul style="list-style-type: none"> 水族館 図鑑を作ろう 本を作ろう 博物館を開こう 水中生物を集めて教室で飼育することや草花などを集めて図鑑や本を作成し伝える。 調べて分かったことを博物館にして展示し、他学年に見てもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> 環境保護 自然理解 地域活動 	○表現力
III	<ul style="list-style-type: none"> ポスター 自然を守ることの大切さを知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自然保護 ボランティア活動 	○自律性 ○判断力
IV	<ul style="list-style-type: none"> 海岸の生き物、塩や豆腐づくりなど体験したことを伝える活動。 遠く離れた山間地の小学校の同学年との交流により、自分たちの学びを伝える。 地域の人たちに、学んだことから大切な内容を訴える。 	<ul style="list-style-type: none"> 広報 伝達 交流 地域活動 	○振り返り ○自己達成感

一人一人の子どもが学習した内容をまとめる時にはそれぞれに違った表し方をする。そこで、教師は、一人一人の表し方について、その方法を子どもから聞き、必要な材料を用意することが大切である。

そして、教師が子ども一人一人のこれまでの取り組みについて、その子なりのこだわりを認めたり、一つ一つの活動について子どもの立場に立って共感的理解をしたりすることにより、子どもはこれまでの活動に自信が持てるばかりでなく、次の活動への意欲づけにもなる。そして、その子なりの見方・考え方を育て新しい知識の創出につながる。

7 結論

体験を重視した学習に取り組むことで、子どもたちが学ぶことへの内的促しがなされ、「総合的な学習の時間」を通して「生きる力」を育むことにつながる。こうした学習は、学校だけで行うことには限界があり、学校が依って立つ地域との連携が有効である。

地域と関わる学習は、今後、シチズンシップや市民性を養う活動へと発展していく可能性がある。今、生活科

と「総合的な学習の時間」の発展にとって大事なことは、主に地域との連携を図り、様々な教育活動と関連づけた具体的な実践が必要であると考える。

また、子どもたちの学習に対する意欲や関心が低下していると言われる。こうした表れを改善するためには、子どもたちの学習の連続性や学習への動機付けを考慮したカリキュラム開発が求められる。このような課題を解決するためには、子どもの感性や体験を重視し、一人一人の願いに寄り添った学習展開が重要であり、次に示すような具体策を提案したい。

- ①「総合的な学習の時間」と他教科・領域と連携を図ることで、それぞれの教科・領域のねらいにせまることができるようにする。特に、様々な人と出会い、学びを広げていくために、人間関係づくりの技能・技術や思いやりの心を同時に育てていく必要がある。例えば、地域ボランティアの積極的な学習への参画をうながすことで、子どもとともに地域にかかわり、交流することによって、子どもと地域の方々とのコミュニケーションが図られ、地域の中で学ぶことの意味をつかむことができる。また、地域の環境を活用し、子どもたちが積極的にかかわることで、地域のよさにふれ、地域に対する見方・感じ方・考え方を変容させていくことができる。
- ②単元づくりにあたっては、目標や実態などから多面的に検討し、学習が進むにつれて子どもの意識が変化することを予測して計画は緩やかなものとし、状況に対応して修正し子どもの学びに即した展開をする。新しい発見や創造がなされ、自分なりの新しい知識の創出につなげていくことができる。
- ③自らの学びを表現することで自分一人ではなく、周りにつながっていることや協働して取り組むことで様々な見方・感じ方・考え方があり、お互いに関係し合っ
て新たな学びが創り出される経験ができることに気づく活動を創り出す。そのための手法として、ICTが役立つことを学び、駆使する力を身に付ける。

《引用文献》

- (1) P.グリフィン, B.マクゴー, E.ケア「21世紀型スキルー
学びと評価の新しいかたちー」三宅なおみ監訳 益川弘如・
望月俊男編訳 北大路書房 2014.4 pp.265
- (2) 文部科学省学習指導要領 総合的な学習の時間編
- (3) 川村光・紅林伸幸・越智康詞 「小・中学校における『総
合的な学習の時間』の実践の変容」関西国際大学研究紀要

第13号 2012 PP.1-14

- (4) 益川弘如他 「21世紀型スキルとキー・コンピテンシー
ーいかに文脈的アプローチを実現するかー」日本教育心理
学会第56回総会資料 pp.120-121
- (5) 中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の
在り方について」1996
- (6) 白水 始 「第5章 新たな学びと評価は日本で可能か」
P.グリフィン, B.マクゴー, E.ケア 「21世紀型スキル-
学びと評価の新たなかたち-」三宅なほみ監訳 益川弘如・
望月俊男編訳 pp.205-222 北大路書房 2014
- (7) 木下康仁 「修正版グラウンデッド・セオリー・アプロー
チ(M-G-T-A)の分析技法」富山大学看護学会誌 第6
巻第2号 2007
- (8) 小野間正巳 「かかわりのなかで自分らしく生きる力を
育てる」有田和正編 学校を変える実践課題NO6 教育開
発研究所 2000.3 pp.219-223
- (9) 小野間正巳・太田充「感じる出会いの活動と課題づくり」
せいかつか&そうごう第10号 日本生活科・総合的学習学
会 2003.2 PP.104-111